様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：17501
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520139
研究課題名（和文）初期バロック音楽の実践的歌唱法の開発
研究課題名（英文）Investigation of the appropriate way of singing the vocal music in the early baroque era

研究代表者
栗栖　由美子（KURISU YUMIKO）
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：30305023

研究成果の概要（和文）：本研究は、17 世紀前半の初期バロック音楽の適切な歌唱法を、理論と実践の両面から具体的に解明したものである。理論面においては、ボヴィチェッリ、カッチーニ、プレトーリウスの理論的著述からの考察をもとに、声楽家のための手引書「初期バロック音楽の実践的歌唱法」を作成し、これを踏まえた演奏を通して、歴史的に的確な歌唱法を提示した。

研究成果の概要（英文）：In this study、 we investigated the appropriate way of singing the vocal music in the early baroque era theoretically and practically. As a result、 we made a guidance book for singers based on the literatures of late 16th and early 17th century、 especially by Bovicelli、 Caccini and Praetorius. And we applied this result to the actual performance in a lecture-concert given in January 2013.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２２年度	1、100、000	330、000	1、430、000
２３年度	500、000	150、000	650、000
２４年度	1、100、000	330、000	1、430、000
年度			
年度			
総　計	2、700、000	810、000	3、510、000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：ボヴィチェッリ、カッチーニ、プレトーリウス、装飾法

１．研究開始当初の背景

近年の音楽史研究においては、楽譜や伝記資料といった書かれた資料だけでなく、生きた音の文化としての音楽という現象そのものに迫る必要が認識されてきており、演奏法の歴史的研究が重要な分野となっている。オリジナル楽器による演奏が一般化し、バロック以前の音楽の良質な実演が増えたことはその成果である。

研究代表者は、日本の代表的な古楽演奏団体、バッハ・コレギウム・ジャパンへの所属や、オランダへの留学を通じて、バロック時代の声楽作品を中心とする演奏経験を積んできたが、その中で、特に我が国のオリジナル楽器によるバロック音楽の演奏が器楽主導のものであり、声楽が立ち遅れていることを痛感した。その原因として、歌唱表現に関しては、楽器という、物として伝わる史料を欠くため、歴史的演奏解釈の追求がより困難であること、また、自らの身体を通じて音楽表現を行う声楽の専門家の間に、過去の演奏実践の再現に対する抵抗がいまだ根強くあ

ることなどが挙げられる。
　そして、イタリア・バロック初期の声楽作品は、声楽を学ぶ初期の段階で、多くの人に教材として用いられてはいるものの、ロマン派的な様式感が漂う伴奏の上で、声のボリュームばかりを追い求め、おおげさな表現を伴って歌う傾向にあり、装飾音符の扱い方やアーティキュレーションなど、バロック時代の演奏法や様式感に無頓着なまま歌われているのが現状である。このような状況は、この時代の歌唱技術の伝統がいったん途絶えてしまったため、適切な歌唱法を探ることが非常に困難になってしまったことに起因すると考えられる。
　以上のような現状を踏まえ、我が国の古楽演奏家たちのみならず、イタリア歌曲を学ぶ声楽の初心者に対しても、この時代の声楽の適切な歌唱法に対する指針を具体的に示す必要があると考え、本研究を開始した。

２．研究の目的

　本研究の目的は、17 世紀前半の初期バロック音楽の適切な歌唱法を、理論と実践の両面から具体的に解明することである。
　理論面では、G.B.ボヴィチェッリの『Regole, passaggi di musica, madrigali e motetti passeggiati　マドリガーレとモテットの即興装飾法』(1594)、G.カッチーニの『Le nuove musiche　新しい音楽作品』(1602)、『Nuove musiche e nuova maniera di scriverle　新しい音楽作品とそれを書き表す新しい方法』(1614)、M.プレトーリウスの『Syntagma musicum　音楽大全』第 3 巻(1618)所収の「Instructio pro Symphoniacis 音楽家に対する指導」等の歌唱理論書の読解を中心にして研究を進める。一方、実践面では、これらの理論書をとおして、この時代の声楽作品を歌唱技法という面から分析し、それを踏まえた演奏実践を通じて、歴史的に的確な歌唱法を追求するものである。

３．研究の方法

(1) 16 世紀後半から 19 世紀に至る歌唱理論書、初期バロックの声楽作品の手稿譜の収集を行う。

(2) 歌唱理論書の翻訳を行い、歌唱技術的側面からの考察を行う。

(3) 収集したバロック初期の声楽作品を、(2) の考察をもとに、歌唱技術と演奏解釈の両面から分析する。また、手稿譜を演奏者が見やすいものとするため、コンピューターを用いて現代譜の作成を行う。

(4) 国内・海外における演奏家と会見し、声楽作品の演奏解釈や必要とされる歌唱技法についての意見を聴取する。また、バッハ・コレギウム・ジャパン他、バロックの声楽作品を扱った演奏会に足を運び、最近のバロック音楽における演奏傾向を把握する。

(5) 本研究のまとめを、声楽家のための手引書として公表し、各研究機関への還元を行う。

(6) レクチャー・コンサートにおいて、手引書に記した歌唱法を、研究代表者本人が実演を通じて具体的に示し、作品の解釈の妥当性やオリジナル楽器と共演した場合の演奏効果などの有効性を実証する。また、この時代の声楽曲を適切に歌うためには、具体的にどのような装飾を施し、どのようなニュアンスをもって歌うのか、それぞれの作品に対してどのようにアプローチしていくのか等、レクチャーを通じて解説していく。

４．研究成果

(1)
　初期バロックの歌唱理論書、声楽作品の収集は、主に上野学園大学図書館と東京芸術大学図書館を利用し、手稿譜に関しては、研究代表者が、スイスのバーゼル・スコラカントールムに赴き収集した。主な手稿譜として、L.ロッシ、G.ガスパリーニ、B.ストロッツィ、A.チェスティ、G.レグレンツィ、F.ガスパリーニ等の作品を入手し、一部は、コンピューターを用いて現代譜に書きなおした。

(2)
　最終的には、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて活動した、プレトーリウス、カッチーニ、ボヴィチェッリの 3 人の理論的著述に絞り、翻訳後、歌唱技術的側面からの考察を行った。
　3 人の著述に絞った理由は、以下のとおりである。

①プレトーリウスが、音楽理論とその実践に関して体系的に著した『音楽大全』全 3 巻は、史上最古の音楽百科事典と称され、歴史的史料としての価値が高いこと、また、プレトーリウスは、第 3 巻 (1618) 所収の「音楽家に対する指導」の中で、著者自身が記述しているとおり、カッチーニの『新しい音楽作品』の序文と、ボヴィチェッリの『マドリガーレとモテットの即興装飾法』を手本に、ドイツにおける声楽の初心者に対して、基本的な歌唱法を示したことから、上記の 2 冊も、当時の声楽の実態を今に伝える重要な文献の 1 つと言える。

②フィレンツェのカメラータの一員でもあったカッチーニは、独唱マドリガーレとアリ

ア集『新しい音楽作品』の序文に、モノディー様式における歌唱法を記述しているが、これまでに、歌唱法に関して、これほど明確に、また詳細に書かれた書物はなかった。

③ボヴィチェッリの著作は、「言葉に関する諸注意」と「音についての諸注意」の 2 部分に分けて記述されているものの、論旨は必ずしも明確ではなく、全体を通じて、論理的に整った記述がなされているわけではないが、当時の歌唱における装飾法についての実践的な見解が披露されている。バロック初期のイタリアで行われていた即興的な歌唱装飾と歌唱技術を知る上では、大変貴重な歴史的史料である。

3 人の著作を読解後、まずは、カッチーニとプレトーリウスの歌唱法における見解と、そこから導き出される指針を明らかにした。次に、ボヴィチェッリの著作を中心に、装飾法に関する 5 つの主要な概念について、カッチーニ、プレトーリウスの記述と比較しつつ検討し、ボヴィチェッリの独自性がどこにあるのかを明らかにした。

以上の研究成果は論文として、所属機関である大分大学教育福祉科学部発行の研究紀要に公表した。

なお、カッチーニの翻訳にあたっては、佐竹淳氏のものを、また、ボヴィチェッリは、本名洋子氏に依頼したものを用いた。プレトーリウスに関しては、研究代表者の翻訳を使用した。(栗栖由美子「M.プレトーリウス「音楽家に対する指導」―翻訳―」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第 31 巻第 2 号、2009 年 10 月、99～114 ページ)

(3)

最終年度のレクチャー・コンサートで演奏する曲は、収集した声楽作品の中から、アッフェット（情感）を動かすことが可能な作品であること、アジリタの技術が提示できる作品であること、といった観点から取捨選択を行い、決定した。演奏する 12 曲については、上記の理論書の考察をもとに、歌唱技術、演奏解釈の両面から詳細な分析を行い、それを実際の歌唱に応用した。

また、B.ストロッツィ、L.ロッシ、B.マリーニ、G.カリッシミの作品に関しては、コンピューターの楽譜作成ソフトを用いて、現代譜化した。

(4)

声楽作品の演奏解釈や必要とされる歌唱技法について意見聴取するために、ストラスブール国立音楽院リュート科教授で、リュート奏者としても国際的に活躍している今村泰典氏と会見するとともに、チェンバロ奏者の上尾直毅氏、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者の櫻井茂氏、リュート奏者の永田平八氏とのオリジナル楽器による演奏セッションを行った。これらをとおして、言葉の扱い方（子音の発音速度、母音の明瞭化、語尾の処理のし方、韻をふんだシラブルの強調等）についての示唆を得た。

(5)

本研究の理論的成果は、声楽家のための手引書「初期バロック音楽の実践的歌唱法」(平成 22～24 年度科学研究費補助金研究成果報告書）としてまとめ、各研究機関を中心に、成果の還元を行った。

手引書の構成は、次のとおりである。

「初期バロック音楽の実践的歌唱法」

第 1 部　カッチーニとプレトーリウス

1. 翻訳：プレトーリウス「音楽家に対する指導」
2. カッチーニとプレトーリウスにおける歌唱法
3. 歌唱法の具体的指針―《アマリッリ》を例に―

第 2 部　ボヴィチェッリ

1. 翻訳：ボヴィチェッリ『マドリガーレとモテットの即興装飾法』
2. ボヴィチェッリにおける歌唱法

第 1 部、2. においては、まず、カッチーニとプレトーリウスの著作で中心となっているアッフェット（情緒）の概念について明らかにした。アッフェットは、バロック初期の歌唱法を論じる上で根幹をなすものであり、それをもたらす歌唱技術として、単・複の声の長い回転、スプレッツァトゥーラ、イントナツィオーネ、エスクラマツィオーネ、トリッロとグルッポがあることを確認した（単・複の声の長い回転、スプレッツァトゥーラは、カッチーニ独自のものである)。そして、以上の歌唱技術を詳細に分析した結果、それぞれの技法がどのような特色を持ち、どのような場所で導入することがより効果的かを明らかにした。その中で、特にカッチーニは、「トリッロとグルッポの演奏にあたって、最後の音まで、喉で繰り返し打つことが必要である」と述べているが、これは、現代の我々が理解している「喉を使う」こととはニュアンスが異なり、1 つ１つの音が明確に聴き取れるように、アジリタの技術（敏捷な動きができる技術）を用いることが必要であることを指摘した。

第 1 部、3. においては、カッチーニとプレ

トーリウスから導き出された歌唱技術を踏まえ、声楽の初心者のほとんどが学ぶ、カッチーニ《Amarilli　アマリッリ》の歌唱法についての考察を行った。その際、パリゾッティ版、イェペセン版、ヒッチコック版、ペートン版を合わせて検討し、最終的には、歌唱声部に関わってはカッチーニの原典に忠実に、研究代表者が現代譜をおこし、《アマリッリ》を歌うのに適した歌唱法を示した。
特に、拍子とテンポの問題を指摘した上で、イントナツィオーネにおけるエスクラマツィオーネ、スプレッツァトゥーラ、トリッロとグルッポ（声の長い回転については、トリッロの中に含める）を、どこで、どのように使用すべきかを明らかにした。また、パリゾッティ版を用いて、ピアノの伴奏で歌う場合の注意点についても言及した。

第２部、2.では、バロック初期の声楽における装飾法について、ボヴィチェッリの著作を取り上げて考察した。ここでは、装飾法に関する５つの主要な概念、パッサッジョ、アッチェント、グロッペット、トレモロ、ティラータを抽出し、それぞれがどのように扱われているのかを、カッチーニやプレトーリウスの記述と比較しつつ検討した。その結果、ボヴィチェッリの、言葉においても音においても、急な終わり方をせず、抑制された終わり方、つまり速度をゆるめつつ終止させるという演奏法は、カッチーニやプレトーリウスとはまったく異なる奏法であり、相違点として指摘した。また、パッサッジョを施す時の言葉の配分の仕方についての注意は、カッチーニにもプレトーリウスにも見ることができなかった、ボヴィチェッリ独自の見解であったことを明らかにした。

(6)
実践面においては、手引書「初期バロック音楽の実践的歌唱法」を踏まえ、オリジナル楽器奏者の協力を得て、以下のようなレクチャー・コンサートを開催し、最終的な成果を発表した。

レクチャー・コンサート 「初期バロック音楽の実践的歌唱法」

日時：平成 25 年 1 月 14 日（月）、15～17 時
場所：ルーテル大分教会（大分市）

出演：栗栖　由美子（ソプラノ）、
永田　平八（リュート）、
櫻井　茂（ヴィオラ・ダ・ガンバ）
上尾　直毅（チェンバロ）
辛島　明美（ピアノ）
松田　聡（レクチャー）

【演奏曲目】

G.Caccini：Amor ch’attendi
愛の神よ、何を待つのか？

C.Monteverdi：Quel sguardo sdegnosetto
あの蔑みの眼差し
：Exulta filia Sion
喜び踊れ、シオンの娘よ

G.Frescobaldi：Se l’aura spira
そよ風がとても愛らしく吹けば
：Aria di Passacaglia
パッサカリアのアリア

B.Strozzi：Amore è bandito
愛神は追放された

L.Rossi：La gelosia
嫉妬

F.Gasparini：Caro laccio
いとしい絆よ
：Lasciar d’amarti
あなたへの愛を捨てることは

L.Rossi：Anime
魂たちよ

B.Marini：Con le stelle in ciel che mai
空の星とともに

G.Carissimi：Il lamento in morte di Maria Stuarda
死に臨んでのマリーア・ストゥアルダの嘆き

（全 12 曲）

ここでは、アジリタの技術を提示した作品の中から、モンテヴェルディの「喜び踊れ、シオンの娘よ」、「あの蔑みの眼差し」について、演奏成果を報告する。また、我々が慣れ親しんでいるパリゾッティ編集の『イタリア歌曲集』から、ガスパリーニの「いとしい絆よ」、「あなたへの愛を捨てることは」を用いて、ピアノ伴奏での歌唱と、オリジナル楽器を使用しての歌唱の対比を試みたが、その成果についても言及する。

①　「喜び踊れ、シオンの娘よ」は、1629 年にヴェネツィアで出版された、様々な作曲家の宗教的作品を集めた曲集の中に収められており、ラテン語の歌詞を持つ作品である。
この曲の中間部において現れる長いメリスマ、そして、最後を締めくくる 16 分音符からなるパッサッジョの連続を歌いきるた

めには、確実にアジリタの技術が必要となる。
まず、中間部の長いメリスマでは、明確なアーティキュレーションを施し、特にフレーズの最後におかれた 32 分音符の同音連打において、カッチーニが著作の中で言及しているように、「それぞれの音を、母音で、最後まで喉で繰り返し打つ」ことを心がけた。そして、最後を飾るアレルヤにおける 16 分音符の連続音型においても、同書で述べられている「速度を落とすことなく、１つ１つの音符を正確かつ明瞭に、鋭く演奏する」ことに配慮し、カッチーニが示したリバットゥータ・ディ・ゴーラの導入も試みた。アジリタの技術を駆使したことにより、中間部においては、朗誦的な歌唱の中で、より重要な言葉を強調することに、最後のアレルヤでは、規則的な速いテンポの中で、様々なアレルヤのニュアンスを表現することに成功した。

1632 年に出版された『音楽の諧謔』に収められている「あの蔑みの眼差し」において、モンテヴェルディは、象徴的な言葉、動きを暗示させる言葉にパサッジョを施している。例えば、sdegnosetto（蔑み）、vola（飛ぶ）、dardo（矢）、ardo(燃える)、nembi(大群)等である。カッチーニにおいては、パッサッジョを長音節上に用いていたが、モンテヴェルディの場合、しばしば短い最後のシラブルに用いることがある。これは、そのパサッジョが軽く演奏されることを示唆しているものと解釈し、長母音におかれたパサッジョよりも、軽さと鋭さを意識したアジリタの技術の導入を試みた。パサッジョにおける以上のような対比は、言葉のアッフェットを表現する上で特に有効であるとの結論に至った。

②　ガスパリーニ作曲の「いとしい絆よ」と「あなたへの愛を捨てることは」は、20 世紀はじめにパリゾッティにより編集された『イタリア歌曲集』にそれぞれ単独の歌曲として収められているが、本来はいずれも同じカンタータ作品の一部をなすアリアであり、『一声による室内カンタータ集』op.1（1695 年、ローマ）に所収されている。2 曲はレチタティーヴォを挟んで続けて歌われ、その後、さらにレチタティーヴォとアリアが続く構成となっている。コンサートでは、まず、日頃慣れ親しんだパリゾッティ版によるピアノ伴奏での演奏を披露した後、オリジナル楽器（チェンバロとヴィオラ・ダ・ガンバ）伴奏で、カンタータの全曲演奏を試みた。特に「いとしい絆よ」については、パリゾッティ版とオリジナル楽譜における、譜面上の違い（音価、速度表示、調性、メロディー、言葉の配置）を指摘した上で、比較演奏を行った。発弦が早く減衰が早いオリジナル楽器の特性を踏まえて、歌唱においては、発音の速度、母音の長さ、語尾の発音処理の仕方等に配慮した演奏を試みた。その結果、アリア、レチタティーヴォともに、言葉が浮き立ち、躍動感のある曲によみがえらせることができた。

本研究の意義は、理論的な考察の、実践による検証という手続きを一貫して用い、それを踏まえた演奏を通じて、歴史的に的確な歌唱法を追求した点にある。この研究により、古楽演奏家たちのみならず、イタリア歌曲を学ぶ声楽の初心者に対しても、初期バロックの適切な歌唱法に対する指針と、新たな視点からの演奏を提案することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①<u>栗栖由美子</u>、<u>松田聡</u>、ボヴィチェッリ『マドリガーレとモテットの即興装飾法』―注釈―、大分大学教育福祉科学部研究紀要、査読有、第 35 巻第 1 号、2013、pp.1～16

②<u>栗栖由美子</u>、バロック初期の歌唱法に関する研究―G.カッチーニと M.プレトーリウスの著作をとおして―、大分大学教育福祉科学部研究紀要、査読有、第 34 巻第 1 号、2012、pp.1～16

６．研究組織
(1)研究代表者
栗栖　由美子（KURISU　YUMIKO）
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：30305023

(2)研究分担者
松田　聡（MATSUDA SATOSHI）
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：60282547